

西郷信綱さんを悼む

私がはじめて読んだ西郷
信綱さんの著作は『古事記
の世界』(1967年)だ
った。大学2年生の時、演説
習のテキストとして読んだ
古事記がおもしろくて、書
店の新刊台に積まれた本を
手にしたのだ。今振りかえ
ると、これは私にとってま
ことに幸運な読書だった。

それ以来『詩の発生』『日
本古代文学』『日本文学の方
法』『万葉私記』など過去の
著作を読み、新しい本が出
るのを待つて読んだ。もし
あのとき別の本を選んでい
たら、古事記研究に進まな
かったかもしれない。
乱暴に区分すれば、19
70年以前の西郷さんは論
理の人、方法の人であつた
のに対して、70年以降はこ
とばの人であった。もちろん
両者は緊密に支えあって
いるのだが、古事記の注釈
作業に向かうあたりに、ひ
とつの転換点を見出せるの
ではなかろうか。

72年頃から数年間、西郷
さんを中心とした勉強会に
参加していた。古事記研究
者の方、女性史家や政治
学者など10名ほどが楽しそ
うに議論する場の文字通り



古事記の世界に挑戦し続けた西郷
信綱さん(1996年撮影)

不滅の探究心で古事記研究

三浦 佑之

末席で、大学院生の私は小さくなっていた。その頭上を、古事記の語句の解釈をめぐって、冰木はヒゲ(髭)だとか、鼻はハナ(端)だとか、ネズミは根櫻みだとか、そんなことが飛び交っていたのを思い出す。書いたものは、分野の違う人に読みでもうのがいいですよと西郷さんに言われたのも、その勉強会の折だったと思う。

晩年のこと、ある学会で講演した西郷さんに、「学者にこつてもつとも大事なものは」という質問が飛んだ。すると即座に、「センスですね」と西郷さんは返答した。練り上げられた論理性と、鋭敏なこぼへの感性を共鳴させながら仕事を続けた人の発言だと感心したものだ。そこには、西郷さん一流の皮肉と照れが混じっていたはずだ。

泥まみれになつた戰前の古事記ときちんと決別し、人文科学の対象として古事記研究を再生させた西郷信綱という学者の功績を、私は忘れないでいたい。そしてまた、筋を通して大学を辞し、毅然として歩き続けた生きかたを見習い、89歳になって出した本のあとがきに「次に何をなすべきかが、ようやく見えて来たらようやく気がする」と書きつける不滅の探究心を手本として、西郷さんのように生きたいと願っている。會掌。

(千葉大教授・日本古代文
学)